平成 24 年度　日本医療薬学会がん薬物療法海外研修報告

昭和大学　薬学部　薬物療法学講座

医薬情報解析学部門　　加藤　裕久

「2012 年度日本医療薬学会がん薬物療法海外研修」に全国から選抜された北から小井土　啓一氏（国立がん研究センター中央病院）、新迫　恵子氏（京都大学病院）そして林　稔展氏（国立病院機構九州がんセンター）と伴に平成 24 年6月１日から9日まで、ASCO（米国臨床腫瘍薬学会）への参加とミシガン大学病院での臨床薬剤師業務を引率・研修したので報告する。ASCO はで5日間の学会参加、ミシガン大学病院では2日間の研修を行った。本報告は各氏の研修への取り組む姿勢と日米の臨床薬剤師業務の違いを踏まえた今後の日本のがん専門薬剤師の方向性について私見を述べることにする。

ASCO はシカゴ（イリノイ州）で開催され、3氏は大変積極的に学会に没頭された。特に、小井土氏は高齢者における抗がん剤投与の問題、新迫氏は最新の乳がん治療、林氏は制吐薬を中心とした悪心・嘔吐対策の発表やシンポジウム、セミナーに参加され、特に各自の専門領域について精力的に情報を収集されていた。ASCO は非常に刺激的なパワフルな学会であり、今後、多くの日本のがん専門薬剤師が参加し発表されることを期待する。研修生も将来、ご自身の発表される姿を、思い描いたのではないだろうか。

ASCO での5日間の学会が終了すると、そのままシカゴからアナーバーへ空路移動した。ミシガン州アナーバーは、喧騒な高層ビルの林立するシカゴとは打って変わって、緑多い閑静なミシガン大学の町であった。ミシガン大学のスクールカラーである黄色と M のマークが緑に映えていた。ミシガン大学病院での２日間の研修によって、日米の臨床薬剤

師業務の違いを3氏は実感していた。その違いを文献や書籍等で知っていても、“原則、患者指導を直接行わない臨床薬剤師業務”を目の前にして、多いに語りあった。「チーム医療」について、日本で表現する場合、医療スタッフらが病棟回診やカンファレンスに参加し、常に一体となって患者の治療について協議するイメージが強い。一方、米国では医療スタッフらの分担制が確立しており、お互いの専門職としての責任の重さをひしひしと感じられた。そして、病棟回診前後に医療スタッフらが真剣かつ綿密に協議する姿は、特筆する点である。日米のマンパワーの差があったとしても、彼らの熱い真摯な姿をぜひ見習いたい。下表に日米の臨床薬剤師業務における一般的相違を示した。日米間の薬剤師業務の違いが明確であり、日本版臨床薬剤師をどのように育成すべきか、古くて新しい課題を胸に突き付けられた。

表　臨床薬剤師業務における日米の一般的相違

臨床薬剤師業務	日本	米国（ミシガン大学病院の場合）
処方権	×	○/△
処方監査	○	○
レジメン管理	○	○
入院患者への薬剤管理指導	○	×/△
外来患者への服薬指導	△	△
抗がん剤調製	○	×

		テクニシャンが調製
臨床研究	△/×	○/△

○:ほぼ実施　△:一部実施　×:ほとんど未実施

今後、がん専門薬剤師の役割を明確にするためには、学会としてどのようながん専門薬剤師を育成しがん医療に貢献させるべきか、つまり、明確ながん専門薬剤師が備え持つべきコンピテンシー(Compitency)を定め、その方策を出口から考えようとする研修成果基盤型プログラム(Outcome based training program)の作成が必要と考える。このような明確な役割を有する日本版のがん専門薬剤師を本学会が養成することにより、社会で望まれるがん治療体制に一歩でも近づくことができると、今回の研修を通じて確信できた。

今後とも本研修が継続され、多くのがん専門薬剤師が応募し、より充実した研修になることを期待したい。最後に引率の機会を与えていただきました日本医療薬学会会頭の安原眞人先生、認定制度委員長の谷川原祐介先生をはじめ、事務局の皆さんに厚く御礼申し上げます。そして、小井土氏、新迫氏、林氏の今後益々のご活躍を祈念しています。

明るい薬学生(白衣)と臨床薬剤師